

発信される情報には主体となる発信者がいることや、情報を収集するためにはマナーを守る必要があることを体験的に理解するために、「日本全国ここが知りたい」をテーマにしたポスターセッションを実施した。情報収集の手段を手紙による収集に限定することによって、情報提供者に対する相手意識や情報を収集する際のモラルを高めることができた。

キーワード 情報社会に参画する態度、情報教育、初期指導、ポスターセッション

1 はじめに

筆者はこれまで、永野（2000）による発達段階に応じた具体的な学習目標を基に、小学校中学年段階において情報教育の初期指導を進めるカリキュラムを開発し、実践を進めてきた（2001a, 2001b）。インターネット上の情報を収集したり、文書による資料を請求する際にも電子メールによる依頼を送付したりといった具合に、ネットワークの活用を前提に実践してきた。

2 問題

しかし、ネットワーク上で情報を収集、選択、整理する能力が向上するにつれ、情報は単にそこにあるものであり気軽に手に入るものだという意識で情報に接する子供の姿が見られるようになった。

そこで、世の中に発信されている情報には、必ず発信者がおり、その発信者の意図が情報を作り出していることや、そういう情報を収集するためには、情報の発信者に自分の意図を伝えるなど適度な礼儀を持って接することが大事なことを感じられるような単元を構想し実践したいと考えた。

情報モラルを身につけるための実践としては、石原（2001）が、インターネット上における個人情報発信の危険性や、不適切な情報に対する接し方など、具体的な場面に即した情報社会に参画する態度を高めるための実践について報告している。しかし、これらは、情報に対する相手意識がある程度高まった高学年を想定したものであり、情報モラルの初期指導の実践については、これま

であまり報告が見られない。

3 身につけさせたい力

情報モラルの初期指導期においては、情報を収集する際に発信者を尊重し礼儀正しく接しようとする態度を育成することや、相手を意識し責任を感じながら自分の情報を発信する力を高めることが大切だと考えられる。

そこで、この単元では、情報収集の手段をあえて「手紙による情報送付の依頼」に限ることにした。返信されてきた情報も、ネットワーク上の情報と同様誰に対しても提供されるものであるが、直接自分宛に送付されてくることによって、情報の発信者を意識し、その相手や収集した情報を尊重するようになるのではないかと考えたからである。また、情報発信の手段として手書きのポスターによるポスターセッションを取り入れることによって、情報の受け手の反応を直接見ることによって、相手を尊重した情報発信が可能になると考えた。

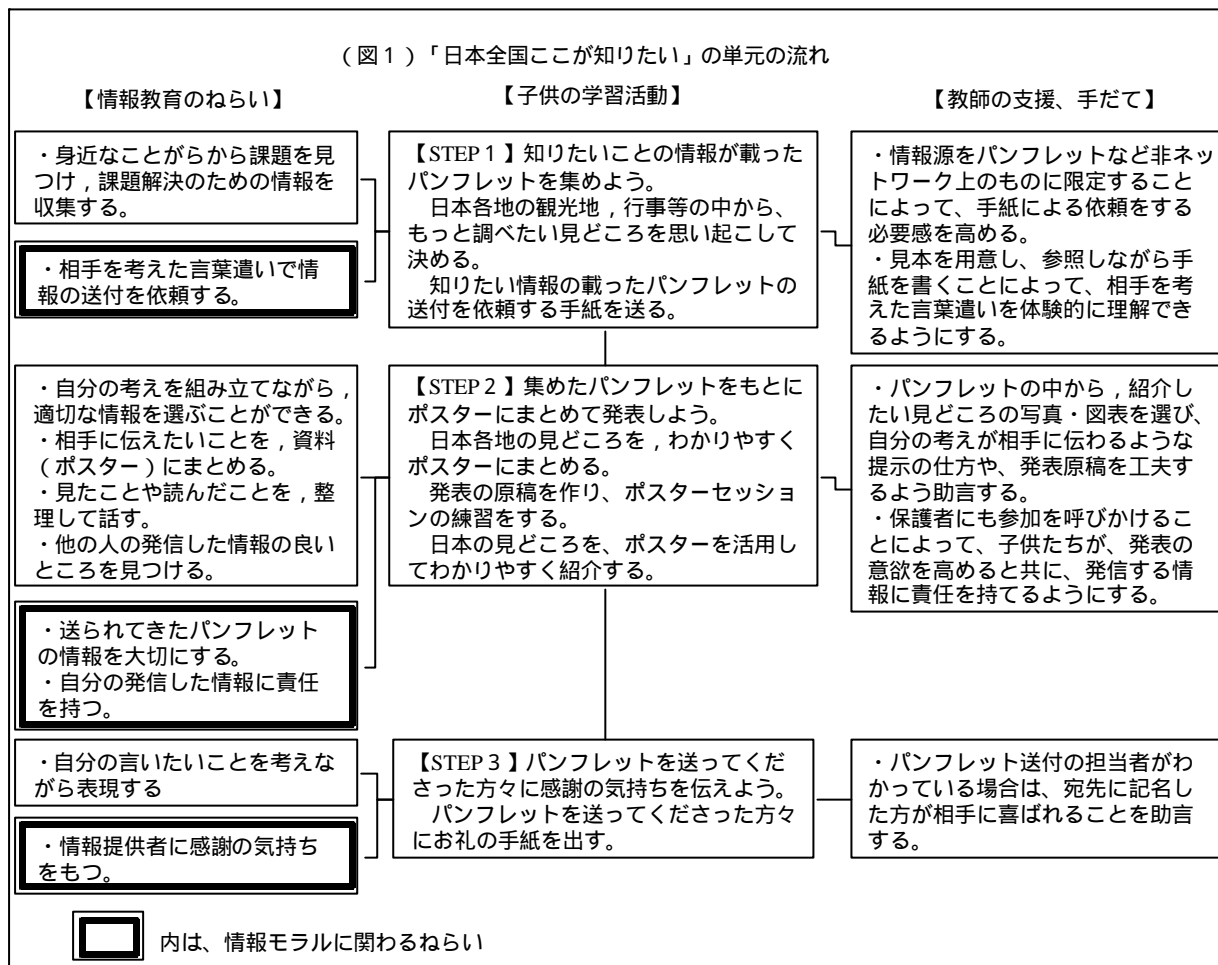
これまでの情報教育の初期指導では、コンピュータなどの新しいメディアやネットワークを積極的に活用してきた。しかし、あえて、ネットワークを離れ、手紙、手書きポスターというアナログな方法を使うことは、相手をより実感しやすく、情報の発信者の存在と責任を意識づけるためには現実的で意味があると考えられる。

以下に、単元開発の考え方と、そこで期待できる子供の能力の伸長について、具体的な事例を基に報告する。

*1 富山市立寒江小学校（k-sasa@p1.coralnet.or.jp）

*2 富山大学教育学部（jun@yokosuka.com）

*3 静岡大学情報学部情報社会学科（horita@horitan.net）



4 単元の構想

本実践では、「日本全国ここが知りたい - ご当地パンフレットを集めよう - 」をテーマに情報を収集し、集めたパンフレットを模造紙に張り出してポスターセッションで紹介するという学習を構想した(図1)。

日本各地の見どころ、食べどころやそこに生きる人々の様子などの中から、自分がおもしろい、不思議だな、もっと知りたいなと感じたことをテーマとして選び、それに関してくわしくわかる情報の書かれたパンフレットを集めて調べまとめる学習である。子供たちが収集したパンフレットや観光ポスターなどをもとに、日本各地の産物、行事、観光地などから紹介したいなと思うことを選んで模造紙に貼り出し、ポスターセッションによって発表する学習である。

自分の意図する情報を収集し、整理、発信する過程における情報活用の実践力の育成を目指した。また、日本の見どころを紹介することによって、自分たちの暮らす国の良さを改めて感じるとともに、相手にわかりやすく伝えるための写真、

図表を選ぶ力や、自分の言いたいことを話す力の高まりを期待した。

その過程で、手紙による依頼状によってパンフレットを収集する、ポスターセッションによってリアルな相手を意識した情報発信を行うなど、あえて、情報収集や発信の手段を限定することによって、情報を収集する際のマナーや発信される情報に対する責任など、情報モラルの基礎に子供たちが目を向けざるを得ないような学習過程を構想した。

5 実践の対象児童

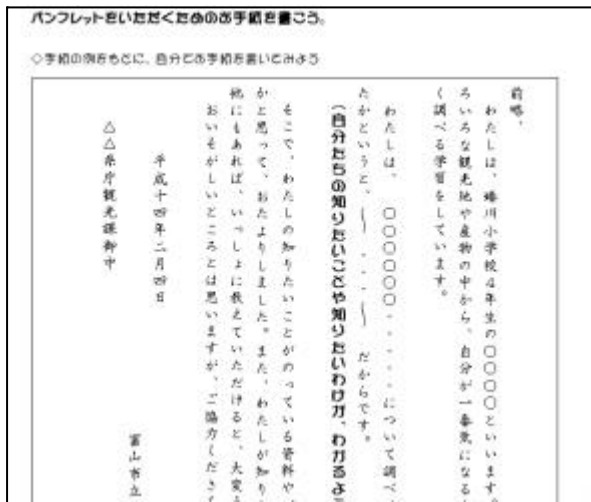
富山市立蜷川小学校4年生児童143名。

子供たちは約30グループに分かれ、4人の教師で指導を行った。

6 実践の実際

【STEP1】 知りたいことの情報がのったパンフレットを集めよう。

子供たちは、これまでテレビや新聞などで日本



(図2)依頼状の文例

全国にある様々な食べ物、産物、観光地などについて見聞きしている。それらの中からもっと知りたいと思うことをテーマとして選択することにした。子供たちは実に様々な視点から、もっと知りたいことを見つけ出していた。

ここから学習を進めるにあたって、以下の2つの条件を提示した。

- (1) 学習の成果はポスターセッションによって発表すること。
- (2) ポスターに添付する資料は、パンフレットなど、相手から直接手に入れたものに限ること。

上記の2つの条件によって、子供たちは、何らかの方法によって、パンフレット等のリアルな資料を手に入れざるを得なくなった。

そこで、もっと知りたいというテーマをもとに学年全体を県別にグルーピングし、知りたい情報の載ったパンフレットの送付を依頼する手紙を、各都道府県の観光課へ送ることとした。手紙を書く際には、学習の目的、依頼したいことを明確に



(図3)届いたパンフレットを開封する子供たち

に提示し記すことや、丁寧な言葉使いに気を付けるよう示したテンプレートを、子供たちに提示し

た(図2)

単に依頼状を送るだけでなく、パンフレット送付のための送料も必要になることから、返信用切手を添えて送るなど、マナーについて考える必然性が生まれていった。



(図4)完成したポスター

【STEP2】 集めたパンフレットをもとに、ポスターにまとめて紹介しよう。

手紙を送付して、2週間もすると、各地から続々とパンフレット、観光ポスター等の資料が寄せられた(図3)。送られた資料は大変多く、また、ほとんどの資料には、子供たちを励ます手紙が入っていた。同封しておいた返信用切手も、「今後の学習に役立ててほしい」との一言を添えて、多くが返送されてきた。

集まったパンフレットの中から、自分たちが紹介したい見どころをもっともよく伝える写真・図表を選び、模造紙に貼り付けてポスターを完成させた(図4)。

次に、貼り付けた写真・図表の順番を考え、ポスターセッションで発表できるように、原稿をワークシートにまとめた。その原稿をもとに、自分の感じた見どころが相手に伝わるように発表の仕方を練習した。

ポスターセッションは、保護者も招待し、3回に分けて実施した。1回は発表者となり、後の2回は聴衆となって友達の発表を自由に聞いて回ることとした(図5)。

【STEP3】 パンフレットを送ってくださった方々に感謝の気持ちを伝えよう

ポスターセッションが終わったのち、子供たちの中から、情報を提供いただいた方々にお礼の手紙を書きたいという声が起こった。そこで、誰に対してどのような礼状を送るか話し合った。単に、パンフレットを送付くださった部課宛に送るだけ



(図5)ポスターセッションの様子

でなく、担当者がわかっている場合は、直接手紙を送付することになった。

7 考察

ポスターセッション終了後の子供たちの主な感想は以下の通りであった。

- ・パンフレットが届いたときは、うれしかった。中に手紙が入っていて、励ましてもらえたのがうれしかった。
- ・自分たちの言いたいことがちゃんと伝えられるか心配だったけど、よくわかったよと言ってもらえてうれしかった。
- ・緊張したけど、自分の言いたいことがはっきり伝えられてよかった。
- ・声の大きさを考えたり、実物の見本を見せながら発表したりして、発表の仕方を工夫しているのがよかった。

これらの記述から、パンフレットを集める過程においては、情報を提供してくれた人の存在を強く感じていることが伺われる。また、ポスターセッションを通して、より正しく自分の言いたいことを伝えようとする態度を育てることができた。友達の発表の中から表現の良さや内容の良さを見つけることもできた。

本実践において、情報収集の方法を手紙による依頼状に、情報表現の手段をポスターセッションに限定したことは、一見子供たちの自由な学習活動を阻害するように感じられる。しかし、どういうテーマで調べ、どのような表現の仕方であらうかについては、子供たちの主体的な学びが保証されているし、これまで、依頼状など書いた経験

のない子供にとって、相手に失礼のない方法によって情報を収集する方法を体験的に理解することは、大変有益なことだと考えられる。

8 結論

情報教育の初期段階においては、情報収集、情報表現の手段を限定することによって、情報活用の実践力に高まりが見られることは、これまでの実践で報告してきた。

情報モラルの初期指導を目的とした本実践においても、情報収集の手段を手紙による依頼に限定することによって、以下のようなことが明らかになった。

手紙のテンプレートを提示するなど、適切な支援を行うことによって、相手の立場を尊重した情報収集の力を体験的に高めることができた。

上記の手段で収集した情報を活用したポスターセッションを実施することによって、自分の発信する情報に対して、愛着と責任をもつことができた。

以上により、本実践の単元構成は、情報モラルの初期段階としては、ほぼ適切であったと考えられる。

本単元では、情報収集・表現の手段をあえて限定しているところに特徴がある。情報活用の実践力や情報モラルが十分身に付いていない児童の学習を見かけ上束縛したり、方向を明示的に示すという方法は、児童主体の学習と一見矛盾するよう感じられるが、情報教育の初期指導段階の単元では、これが前向きに作用することは本実践からも明らかになった。

[参考文献]

- [1] 永野和男ほかネットワーク教育利用促進研究協議会(2000)：情報教育カリキュラム (<http://kayoo.org/sozai/>)
- [2] 笹原克彦, 高橋純, 堀田龍也(2001a)：「情報教育の初期指導における情報収集・情報表現の高まりの分析」日本教育工学会研究報告集 JET01-3, pp19-24
- [3] 笹原克彦, 高橋純, 堀田龍也(2001b)：「情報教育の初期指導を目的としたカリキュラムの開発と実践」第27回全日本教育工学研究協議会全国大会, pp.33-36
- [4] 石原一彦(2001)：「情報の意味を理解し、判断する力を育てる情報モラルの授業」学習情報研究 2001.11月号